メタルファイトベイブレード番外編『新旧ベイ対決！？　ペガシス対ドラグーン！』

ゾダグァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メタルファイトベイブレード番外編『新旧ベイ対決！？　ペガシス対ドラグーン！』

【Ｎコード】
Ｎ５８９２Ｍ

【作者名】
ゾダグァ

【あらすじ】
『爆転シュートベイブレード』と『メタルファイトベイブレード』のクロスオーバー。
舞台はチャレンジマッチ開催中の日本。バトルブレーダーズ出場のためにベイポイントを集めていた鋼銀河は、とあるブレーダーと出会った。その名は木ノ宮タカオ。現在は使われていない古いタイプのベイブレードを使いながらも、地方大会の決勝戦にまで勝ち進んだ強者だ。銀河はそこで時を超えた勝負に挑むことになる。

前編（前書き）

『爆転シュートベイブレード』と『メタルファイトベイブレード』のクロスオーバー。前者はドラグーンF（ファントム）登場から少し経ったころ、後者はバトルブレーダーズ開催期間中を設定しています。原作は「爆転」はGレボリューションズ以前とコロコロ連載を途中から、「メタルファイト」はアニメをチャレンジマッチ開催直後から、バトルブレーダーズでのサジタリオとリブラの戦闘より前までしか見ていない時点で書いたため、設定と違う点があります。それでも気になさらなければ、見て下さるとうれしいです。

前編

――――ベイバトル。それは、互いのブレーダーが互いの魂であるベイブレードをぶつけ合い、競い合う物である。
だが、そのベイバトルを利用して自らの野望を成就させようとする一団があった。その名は『暗黒星雲（ダークネビュラ）』。そして禁断のベイブレード『エルドラゴ』を復活させ、強大な力を得た彼らに立ち向かう少年が居た。ベイブレードを誰よりも愛する少年、鋼銀河である。彼は父親に託されたベイブレード『ペガシス』を駆り、仲間達と共に日夜戦い続けているのだ。

メタルファイトベイブレード番外編『新旧ベイ対決！？　ペガシス対ドラグーン！』前編

「あれ？　こんな所、近くにあったか？」

少年は自分がいつの間にか知らない道を歩いていることに気づいた。
ついさっきまで、自分は学校と自宅の間の道を歩いていたにも関わらず、周りの景色は都会。周りには知らない建造物がそびえ立っていて、おまけに空には飛行船まで浮いている始末だ。

「まさか……オレ、道に迷っちまったのか？」

少年は呟く。

と、その時飛行船の腹に備え付けられた液晶画面にバンダナを頭に巻いた男の姿が映った。

『さあ、チャレンジマッチが開幕してはや3日。ここまででバトルブレーダーズ本戦への切符を取った者はまだ居ない。みんな、5万ベイポイント目指して頑張ってくれ！』

どうも、ベイブレードの大きな大会があるらしい。ベイポイントと言うものが何かは分からないが、チャレンジマッチと言う物に出ればわかるだろう。

「なあ、この大会に鋼銀河が出るんだってさ！」

「すげえじゃん！　アイツに勝てばすげえポイントがもらえるんだろ？　そしたらバトルブレーダーズになんて余裕だな！」

――と、彼の横を同年齢位の少年たちが噂話をしながら歩いて行く。話の中にベイやバトルブレーダーズと言った単語が含まれているので、おそらくブレーダーだ。

「ちょうどいいや、アイツらに聞いてみよう。

――おーい！」

足を止めた一団に向かって、少年は駆けて行った。

××××××××××××××××××××××××××××××××

『さあ、この地区でのチャレンジマッチもいよいよ大詰め！　現在勝ち残っているのは４人だ。まずは……』

鋼銀河は選手控室で自身のベイブレード――――ストームペガシスを整備していた。
部屋毎に設置されているモニターには会場の様子が映し出されており、大会の進行を行うブレーダーＤＪが予選を勝ち残った選手たちの紹介をしている。

『次に今回チャレンジマッチ初出場となる木ノ宮タカオ選手だが……』

「……ん？　なんだ、コイツ」

作業をしながら聞き流していたのだが、ある選手の解説が始まるとＤＪの歯切れが悪くなった。
一体どうしたのだろう。
銀河は気になって画面を見た。

「うわ、めちゃくちゃ旧式のベイだな……」

選手名と共に映し出されたベイは、ベイブレードが登場して間もない頃に現れたタイプ。今から１０年ほど前の型落ち品だ。
ハッキリ言って、良く勝ち抜けたものだと思う。きっと偶然だ。
銀河はそう思った。
だが、予選での木ノ宮タカオの戦いを見て、彼は思わず持っていた工具を取り落してしまった。

「なんだよアイツ、めちゃくちゃ強いじゃないか……」

画面に映るバトルは凄まじいものだった。

タカオのベイ――――ドラグーンは常に圧倒的な速度とパワーで攻め、バトルによってはものの数秒で相手をスタジアムアウトさせてしまっていた。

しかし、なにより銀河が驚いたのはその回転方向だった。

「――――左回り。エルドラゴと一緒じゃないか！」

現行のベイブレードの中で唯一左回りなのが、ライトニングエルドラゴだ。それを持つのはダークネビュラの首魁である竜牙。彼の宿敵である。

『行け、ドラグーン！』

希しくも、双方同じ龍をモチーフ。何か繋がりがあるのだろうか？

銀河は思案する。

「まさか、ダークネビュラと何か関係があるのか？　それにしては真っ当なブレーダーだけど……」

画面に映るタカオはバトルが終了すると、相手の握手ににこやかに応じている。ダークネビュラ所属のブレーダーにしてはフレンドリーすぎる。

銀河は心の中に湧き上がって来るものを感じていた。それは好奇心でも怒りでもない。それは……

「アイツと、戦ってみたいな」

ブレーダーがブレーダーに対して持つ、闘争心だ。

×××

『さあ、チャレンジマッチ決勝だ！』

スタジアムを見下ろすリフトの上。大型モニターを背後に、ブレーダーＤＪが叫んでいる。

木ノ宮タカオは選手控室からスタジアムに通じる通路から会場を見ていた。

『それでは、ここまで勝ち抜いてきたブレーダー２人を紹介しよう！

――――まずはみんなが知っている鋼銀河選手』

ＤＪが言い終える間もなく、歓声が会場を覆った。タカオとは反対側の通路から歩いてくる人影がある。画面に移されているのと同じ顔。鋼銀河だ。

『使用するベイはストームペガシス。これまで数多くの大会を勝ち抜いてきており、最もバトルブレーダーズに近いと言われる男だ！』

世界中で数々の強敵と試合ってきたが、鋼銀河の名はとんと聞いたことがない。だが、皇大地（すめらぎ）などの例もある。凄腕のブレーダーは意外と野に溢れているものだ。

へえ、そんな奴がまだ日本に居たんだ。と、その時のタカオは感

心した。

『続いて、木ノ宮タカオ選手の入場だ！』

自分の番だ。

タカオは相棒（ドラグーン）を握りしめ、会場へと歩いて行った。

×××××××××××××××××××××××××××××××××××××

さあ、来い。木ノ宮タカオ。

スタジアムの前に立ち、銀河は身構えていた。

タカオにダークネビュラとの関連があるのか。モニターでタカオの戦いを見てから、ずっと考えていた。だが、結局一つの結論に達した。ブレーダーの魂であるベイでぶつかりあうのが一番手っとり早い。

『今回がチャレンジマッチ初出場の木ノ宮選手。旧型ベイを使いながらもその実力は侮れず、本大会では全戦ストレート勝ちと言う猛（もの）者（さ）だ！

転技こそ使わないが、どうしてこれまで存在が知られる事が無かったのか実に不思議に思われる』

ＤＪの解説と共に、銀河とは反対側の通路からタカオが現れた。

観客席から聞こえてくる歓声に手を振ってこたえるなど、緊張の色は見えない。

絶対に、大会に初参加なんて嘘だ。
銀河は直感した。

「はじめまして。鋼銀河だ」

「オレは木ノ宮タカオだ。よろしくな」

スタジアムを挟んで向かい合った2人。
さわやかに挨拶が交わされる。

『さあ、両者構えて』

互いにベイをシューターにセット。
途端、タカオの気配が変わった。
凄まじい闘気。かつてのエルドラゴとの戦いを彷彿とさせるが、
不思議と心地が良い。

『3！』

セットしたベイから手を離し、指をワインダーにかける。

『2！』

シューターの入射角を考えて、左腕の位置を動かす。

『1！』

ワインダーを持つ右手に力を込め始める。

『ゴー！　シュート！』

続く。

後編

メタルファイトベイブレード番外編『新旧ベイ対決！？　ペガシス対ドラグーン！』後編

『ゴー！　シュート！』

ワインダーを引くことでベイがシューターを離れる。相棒（ペガシス）はスタジアムへと向かって行った。

「行け、ドラグーン！」

相手のベイはスタジアム中央を突っ切り、まっすぐにペガシスに向かって行く。思い切りがいい攻撃だ。

「ペガシス、こっちもだ！」

受けて立つ。

ペガシスはスタジアムを周回する軌道から一転、ドラグーンに向かって行った。

「「――！」」

激突。

その余波でスタジアム全体に凄まじい風がやって来る。ＤＪが何か言っているが、まるで聞き取れない。

「く――！」

腕を顔の前にやってやり過ごす。

対岸を見ればタカオも同様に対抗している。しかし、その口元には不敵な笑みが浮かんでいる。

「ストームから進化したファントムに……風は味方だ！」

タカオの叫びとともに、ドラグーンがペガシスを押して行く。

「引くんだペガシス！」

不吉な予感を得て、咄嗟に距離を取る。

ドラグーンは先ほどまでペガシスが居た軌道上を通過して行った。勢いに乗ったドラグーンはリングの淵ギリギリまで向かったが、何とか踏みとどまってリング内で反時計回りの軌道に入る。

「追え、ペガシス！」

軌道が安定するまでの間がチャンスだ。

銀河はペガシスを時計回りの軌道に乗せた。

「行っけえ！」

ドラグーンが回避したため、すれ違う2器。

ウィールとアタックリングがほんの僅かに触れ合う。ただそれだけのことだが、互いに高回転を維持しているだけにそれだけで火花が散る。

「やるな、銀河」

タカオから称賛の言葉がかけられる。

「オレは世界大会でＢ．Ｂ．Ａの代表の一人として参加したことがあるけど、ここまで燃えるバトルができる相手が日本にまだ居るとは意外だったぜ」

「は？」

銀河は思わず疑問府を浮かべてしまった。

現在のベイブレードの世界大会では、出場できる選手の年齢制限がある。

なんでも、以前の大会で危険なベイが多く存在したためらしい。初期の大会では逆に若年者ばかりだったと言う話だが……。

とにかく、目の前に居る少年が参加していると言う事はまず考えられない。

「……？　どうしたんだよ、オレの顔なんかじっと見つめやがって」

とは言っても、タカオが嘘をついている様にも見えなかった。

「悩むのは後にしよう。今はとにかく勝負！

――――必殺転技『天馬流星撃（ペガシス・シューティング・スター・アタック）！！』」

必殺転技を発動。

ペガシスのフェイスに描かれた絵柄が輝きだす。上空に舞い上がると、現れた天馬のオーラと共にドラグーンに向かって行く。

「迎え撃て、ドラグーン！
――――『幻影爆風撃（ファントムハリケーン）！！』

タカオの叫びにドラグーンが応える。龍の絵が描かれたビットチップが輝き、龍のオーラが現れた。
咆哮は音の領域を超え、羽撃きによって起こった風は先ほどの激突の比ではない。

『銀河選手の必殺転技に対して、木ノ宮選手も負けじと、今大会初めての必殺転技で迎撃。さあ、勝利の女神はどちらにほほ笑むのか！』

「「「「「「「オオオオオッ！」」」」」」」

２器が引き起こす暴風は凄まじい音を立てている。
しかし、その音をかき消してしまうほど、観客は盛り上がっているようだ。
声援でドーム型の会場を支える鉄骨が揺れる。

「「うおおおお！」」

２体の獣が激突する。
閃光と爆発。
会場は完全に粉塵に閉ざされてしまった。

『視界は丸っきり煙で覆われているが、勝負の行方はどうなったのか！』

換気扇をフル稼働させることで徐々に晴れて行く煙。ＤＪの言葉に応えるように視界が徐々に回復していく。

「ペガシス！」

最後にスタジアムが現れると、銀河が叫んだ。破壊されたスタジアムの中心には、ペガシスが回転を止めて横たわっていたのだ。

ドラグーンは、ドラグーンはどうなった。

１器の回転が止まっている以上、残る１器の状態が勝負の行方を決定する。するのだが……。

『なんと、居ません！　木ノ宮タカオ選手とドラグーンＦ（ファントム）の姿がないぞぉ！』

銀河の対岸に居たタカオと、ドラグーンの姿がいつの間にか無い。

『木ノ宮選手、いたら返事を。木ノ宮タカオ選手！』

ＤＪが会場全体に呼びかけるが、どこからも返事はない。

１０分ほど放送が続けられた後、木ノ宮タカオの捜索は打ち切られた。

×××××××××××××××××××××××××××××××

『それでは、優勝者の銀河選手に賞品のベイポイントが支給されます』

結局、決勝戦は木ノ宮タカオの試合放棄と言う事で、鋼銀河の優勝が決まった。
会場内には落胆の息と、トトカルチョでタカオの勝利に賭けた者達の怨嗟の声が渦巻いている。

『それでは銀河選手、おめでとう』

ベイポイントを授与するため、ＤＪは銀河にベイポインターを出すように促す。
しかし、銀河の心の中ではあることが決まっていた。

「もらえない」

『は？』

「俺とタカオとの決着がつくまで、そのポイントはもらえない」

銀河はそう言ってステージを降りた。
そう、木ノ宮タカオとの決着をつけるまで、彼はこの大会の賞品であるベイポイントに手を着けないと決めたのだ。

『あ、ちょっと銀河選手〜！？』

背後からＤＪのこえが聞こえるが、無視して出口に向かって歩いて行った。

××××××××××××××××××××××××××××××××××××××

「ナイスバトルだったネ、銀河」

会場から出て駅に向かう銀河の背に声をかける者が居る。
振り返ると、そこに居たのは２０代半ばと言った風情の男性。金髪碧眼のあたり、日本人では無いのかも知れない。

「誰だよ、アンタ。オレに何の用だ？」

タカオの件で苛立っていた銀河はつい、ぶっきらぼうに訊ねてしまう。

「ＯＨ～！　恐いネ。ボクの名前は水原マックス。見ての通りのイケメンブレーダーさ」

「ブレーダー？　なら、勝負の申し込みか……。受けて立つぜ」

腰に付けられたホルダーからシューターを取り出そうとすると、マックスは首を振った。

「ＮＯ，ＮＯ　確かに戦ってみたいケド、先客に頼まれてネ。
――――キミに木ノ宮タカオとの決着をつけさせてあげるヨ」

×××××××××××××××××××××××××××××××××××××

マックスの言動を胡散臭いと思いながらも、結局ついて行くことにした銀河。駅前の駐車場に停めてあったマックスの車に乗り込んで、着いたのは古いドームであった。

「中に入って」

車から降りると、マックスは建物の中に入るように促した。
言われるままに入って行くと薄暗い中、見覚えがある形をしていることが分かる。

「ベイスタジアム……？」

「……とは言っても、今の形のベイになる前に使われていたものだけどな」

明かりが灯され、眩しさを感じる。
銀河はなんとか声の聞こえる方を向いた。

「久し振りだな、鋼銀河。……とは言っても、君にはついさっきか」

「木ノ宮……タカオ……？」

目が慣れてきてようやく姿の判別がつくようになる。
そこに立っていたのは、年の頃こそ違うが、木ノ宮タカオと分かる男だった。

「な？　嘘じゃないだろ、マックス」

驚きで言葉が出ない。
何故自分と同じ位の年のタカオが大人になっているのだ。
銀河が呆然としていると、マックスがタカオに声をかけて来た。
「ホントにビックリしたヨ。ＷＢＢＡの理事として大会の見学をしていたら、昔のタカオが参加しているんだから」
「これで１０年前、俺が嘘をついてないって分かっただろ？」
「１０年前……？」
思わず口に出してしまった。
それは、つまり……。
「タイムスリップってやつだろうな」
タカオは語り始めた。
「大体１０年前の話になるんだが、俺はいつの間にか全く知らない町に来ていたんだ。ちょうど大会があったから参加してみたんだが、そこでは見たことのないベイしか無いし、最新型のはずのドラグーンＦが旧式呼ばわり」
そう言って取り出されるのは、ビットチップこそなく、古ぼけて見えるが、決勝でタカオが使っていたベイ、ドラグーンＦ。
「腹が立ってたし、相手もそれほど強く無かったんで速攻で決勝戦まで勝ち抜いたんだ。でも、そこであるブレーダーと戦った。聖獣の力を持ったベイを使っているめちゃくちゃ強い相手で、名前を――

「鋼銀河って、言ったんだな」

タカオはそうだ。と、頷いて続ける。

「だけど聖獣同士がぶつかったら、いきなり光に包まれてさ。気が付いたら家の近所に居た。あの後お前のこと探したんだが、見つからなくってさ。誰にも信じてもらえなかったんだよ。それで今日の今日まで気になっていたんだが、ＷＢＢＡで理事やってるマックスがたまたま今日の試合見てて、呼んでくれたおかげで今君の前に居る。

―――何で君をここに呼んだかわかるよな？」

わざわざこんな場所まで連れて来たのはこう言うことか。

銀河は頷いてシューターとベイを取り出した。

「１０年前……そしてさっきの決着をつけようぜ、タカオ（・・・）！」

「分かってるじゃないか。行くぜ、銀河！」

「３……２……１……」

マックスがカウントを取り始め、２人はスタジアムの前でシューターを構えた。

「ＧＯ！　Ｓｈｏｏｔ！」

ワインダーが引かれ、スタジアムに向けて飛ばされる２器。

銀河は相手のベイを見た。回っているせいではっきりと形を見る

ことは適わないし、随分と違う部分があるように見受けられたが、確かにドラグーンだ。

「ドラグーンＭＦ（メタルファントム）だ。１０年分のキャリアがある分こっちが有利になるが、手加減はしないぜ！」

「それでも勝つのはオレさ！」

「ドラグーン！」　「ペガシス！」

ビットチップとフェイスに描かれた紋章から青龍と天馬が現れて、互いに威嚇し合っている。

「武神風撃（アルティメットストーム）！」

先程のバトルとは違う技。より力強く、より神々しい。

なんともまあ不思議なことが起きたものだと呆れるが、これだからベイは楽しくて仕方がない。

銀河は笑みを浮かべながら、叫んだ。

「―――天馬流星撃（ペガシス・シューティング・スター・アタック）！！」

終わり。

後編（後書き）

きっと同じネタを思いついた方の多いだろう話です。新旧対決は燃えますよね。実はメタルファイト以降のベイには触ったことがなく、実際に戦わせてみたらどうなるのかは全く分からないまま書いています。そんないい加減な作品を、貴重な時間を使って読んでいただいてありがとうございました。また機会がありましたら、私の別の作品にも興味を持っていただけると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5892m/

メタルファイトベイブレード番外編『新旧ベイ対決！？　ペガシス対ドラグー

2010年10月9日06時45分発行